新世紀ミュージアム

良渚博物館
良渚博物院／中国

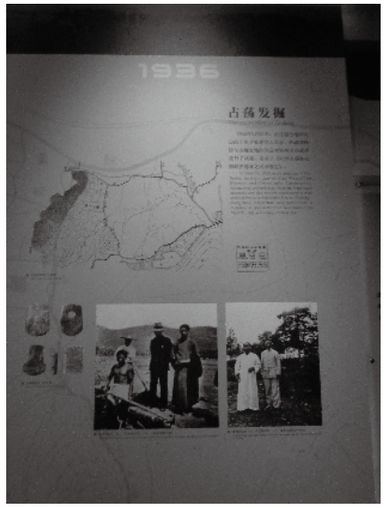
韓敏　民博 超域フィールド科学研究部

中国長江文明をになうとされる遺跡の上に建設された省立の良渚博物院。考古学調査の成果に基づいた展示をおこない、新石器時代の文化を学ぶ場として開館したこの博物館は、市民や他館と連携した活動を展開している。

良渚博物院は、浙江省の考古学博物館である（杭州市郊外）。良渚は町の名前であり、一九三六年に新石器時代の遺跡（紀元前三四〇〇年―同二二五〇年）として発見され、良渚文明発祥の地として知られている。遺跡区に建設されたこの博物館は、二〇〇八年九月にオープンし、敷地面積は四万平方メートル、展示面積は四〇〇〇平方メートルであり、収集、保存、研究、展示、教育の多機能をもっている。中国の大多数の国公立博物館と同じように、良渚博物院も見学無料で、毎年四〇万人が訪れる。常設展は考古学の研究成果を展示する「発現求真」、新石器時代の暮らしを再現する「良渚古国」と「良渚文明」の三つの部分からなる。

七〇年間の考古学研究の成果

「発現求真」は、発掘当時の新聞、写真、地図、陶器・石器などの発掘遺物をとおして、良渚遺跡の発見となる一九三六年の最初の発掘から二〇〇七年の城壁出土にいたる考古学調査の成果を展示したコーナーである。西湖博物館の施昕更氏が故郷の良渚で考古学的調査を三回おこない（一九三六年一二月―一九三七年三月）、発掘した石器、陶器と玉器を炭素一四法に基づいて測定したところ、五〇〇〇年前の遺物だったということがわかった。のちに『良渚――杭県第二区黒陶文化遺址初歩報告』（浙江省教育庁、一九三八年）を出版し、良渚遺跡と命名した。



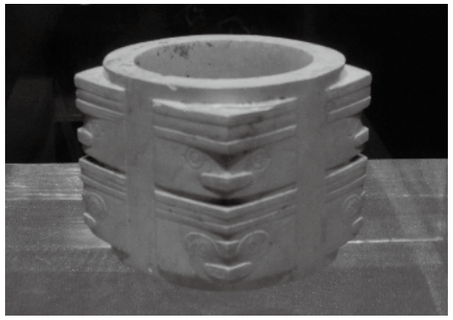
施昕更氏が1936年におこなった良渚での考古学調査の様子を示すパネル（掲載写真はすべて2016年に撮影）

この遺跡で五〇〇〇年もむかしに育まれた文化は、考古学者の夏鼐氏によって一九五九年に「良渚文化」と命名され、その後二〇〇七年の良渚古城と集落の遺跡の発掘を経て、後継の研究者らによって「良渚文明」とよぶべきものであるという学説が提起された。展示場のジオラマからは、良渚遺跡が東西一五〇〇―一七〇〇メートル、南北一八〇〇―一九〇〇メートルの囲壁と、二九〇万平方メートルの面積をもつ中国最大の古代都市遺跡であることがわかる。水利施設群、祭壇と城壁をもつ古代都市遺跡であることが確認されただけではなく、良渚文化は河姆渡文化（紀元前五〇〇〇年―同四五〇〇年）の後に続く、長江デルタの新石器文化であり、長江文明の一部をになうものであることがわかり、中国史像全体の見直しを迫るものとなった。

暮らしの再現展示

「良渚古国」コーナーでは、絹、漆器、玉器といった資料に加え、農耕、漁猟、料理、木材加工、家作りのための道具も展示している。政治的中心とされる莫角山の祭壇を建設した当時の再現模型には、高みに男性の首長と妻であろう女性が立ち、その後ろに従者がひかえ、指示を与え、人びとが建設に励む姿や武器を携えた兵士の姿もみられる。これらにより、五〇〇〇年前の人類社会の分業や階層化と人びとの暮らしがわかるようになっている。

「良渚文明」コーナーでは、良渚遺跡で発掘された遺物のなかでも特に優れたものとされる玉琮、璧（祭祀用あるいは威信財。円盤状で、中心に円孔をもつ）、鉞（権威の象徴である大型の斧）の玉器が展示されている。玉器には、可愛い亀や小鳥の装飾があるものもあれば、神人獣面紋があるものもある。当館の学芸員によると、琮には一段から十段を超えるものまである。玉琮の使い方はまだ不明だが、一説では地を祀る、あるいは祈願の道具として使われたようである。いずれにしても大量の玉器の出土は、良渚文明の特徴としてみなされている。また、長江文明の一部である良渚文明は東北の遼河文明、華北の黄河文明と同様、中華文明をになうものであると同時に、同じ新石器時代の古代エジプト文明、シュメール文明、ハラッパー文明を含む都市文明のひとつとして説明されている。


2段の玉琮の四隅には神人獣面紋の線刻装飾がなされている（良渚遺跡から出土）

他施設や市民との連携

常設展のほかに随時、特別展も開催される。筆者が見学した商周時代（紀元前一六〇〇年―同二五六年）の青銅器の特別展（河南博物院出品）はそのひとつである。来館者は黄河流域で出土した巨大な青銅器に圧倒されていた。案内してくれた学芸員の話によると、河南博物院のリニューアルによる一時閉館を利用して、良渚博物院は今回の特別展を企画したとのことである。休館期間を利用して他の博物館と連携展示をすることは、民博の展示を考えるうえでも参考になるだろう。

社会連携に関する工夫として、まず「国際博物館の日」（五月一八日）が設定されていることがあげられる。「国際博物館の日」とは、博物館の社会的な重要性についての普及啓発をおこなうことを目的として国際博物館会議（ICOM）が一九七七年に提唱したものである。良渚博物院は、毎年の五月を「ミュージアムマンス」とし、周辺の学校、広場、町内会などに出前のミニ展示と授業をおこなう。

また多くの市民に親しんでもらうために、良渚博物院は八名の専属解説員以外に、市民や大学生から解説ボランティアも募集している。研修を受けて合格した人が、来館者に案内解説をおこなう。学芸員の陳さんもかつてここの志願者だった。浙江省の浙江交通職業技術学院に在籍していたころの彼は、来館者に解説しているうちに博物館の仕事に生きがいを感じるようになり、卒業の後ここに就職したのである。ボランティアによるガイドツアーは、市民と博物館をつなげる魅力的なしくみであるといえよう。

特別展にて、学芸員の陳さんがボランティア志願者に解説をおこなっている